

巨人の名を関する星座の一角が崩れ去った後のいきさつについては様々な憶測が乱れ飛んでいたが、原因と目される超新星爆発は未だ地上で観測されていなかった。その光がそろそろ天上で見られるのではないかと伝える連日のニュースに人々の目は夜空へ吸い上げられており、宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーンも同様だった。

大学内でも外れにある光の少ない山裾の休憩区域は天体観測に持ってこいであり、設置された机と椅子で向い合って座る少女らの前には宇宙——ミクロコスモスと名付けられた球体型の宇宙解説アプリが浮かぶ。今から起

きる天体ショーについて樹脂製のコンタクトレンズへ投影された拡張現実を駆使する掻い摘んだ説明を蓮子はしていたがメリーは退屈そうだった。

「長いよ蓮子」

「そうは言うけどね。メリーは半球形のドームの内側に星を散らした古代バビロニアの夜空を信じてそうなんだもの」

「天動説は好き」

「そういう事を言うからしつかり説明してるんじゃない」
「だからって超新星爆発のせいで飛来してくる光の種類やら粒子の形状予測やらを聞かされる事ないわ。さあさあ。どうせ今夜は長いのだし、退屈な話は切り上げて次の活動予定を固めましょうよ」

不満に唸りつつ机上の手帳をめくる蓮子の横で空を見上げていたメリーは呟いた。

「一九時二八分一四秒」

蓮子も夜空を仰いで頷く。

「正解」

「外すわけじゃないじゃない」

嬉しそうにメリーは微笑む。星と月の位置から時間と緯度経度を割り出す拡張現実のプログラムをメリーは組み込んでいた。今日この時をただ夜空を見上げてはつまらないと言い出したのはメリー、どこからかプログラムを用意してきたのは蓮子。さしずめペア・アイといったところ。

「数字が出てくる過程はどうあれ蓮子とおそろいね。気

持ち悪い」

「話していかないだけで私の目にも時間と座標用の文字が踊っているかもしれないよ。どちらにしろ、こうなってしまうば私はお役御免かしら。秘封倶楽部の名はメリーにお譲りしますわ」

「隠居にはまだ早い。倶楽部活動に蓮子の目そのものがどれほど役に立って？」

「手厳しいなあ」

常のごとく交わされる言葉は気軽に懐かしげで、もう二人は強いて空を仰ぎ見ようとはしない。このまま暁を見ることになるだろうとお互いが思い始めたころ不意に空から星が消えた。リアルタイムで天体情報を更新していた文字列の騒がしさに蓮子が気づくよりわずかに早く、

ふと頭に引つ掛かるものを感じてメリーは視線を空へ昇
らせた。

確かに星は消えていた。拡張現実で目印を付けていた
ために見間違うはずもない星の削除をしばらく無言で見
てから、鋭い手つきで電子の幻を蓮子は払いのけた。超
新星爆発が起きたのであれば光は増大するはずであり、
消失するとなれば少なからぬ時間が必要のはずだった。
固唾をのむ人間のごとく空気はそよともせず動きのほ
とんどを止めており、今や大地も秘封倶楽部と同じ結論
に至ったとみえる。目の前の星は不可思議に囚われたの
だ。

「メリー。何か見えない」

「いいえ」

目の前で起きていることの異常性よりも、結界へ関係する際に起こる頭の重圧を感じていることがメリーを困惑させている。

「食べられたんだわ」

無意識にメリーの口から滑り出た言葉で遂に二人は凍りついた。天を食らうという行為に対して悪意以外の何を感じ取れというのか。

先ほどからメリーが嵌^はめた戯れの仮想現実エラーを吐きっぱなしだ。対して蓮子の瞳は無事であり、見上げれば時間と場所を教えてくれている。だがいつまでそのままなのだろうか？ この現象は世界の科学者が観測と分析を進めるだろうし、星辰の乱れには京都の古い権威である結界関係者も動きだすだろう。だがそれは何時に

なる？

「天の光を探すって学生にもできるのかしら」

「国生みの石ころが手に入るくらいだし、できるんじゃない？」

常のごとく二人は笑う。

「私は私の空を元に戻したい」

「じゃあやろう。次の活動方針は決まりね」

どちらにせよ、手をこまねいておける性分でもなかった。

空き時間での調査だけでは不足した秘封倶楽部が申請した遊学の許可は驚くほど簡単におりた。想像した以上に夜空の異変は人々の行動を誘発したらしく、すでに多

くの教授と学生連中が飛び出していったらしい。

まず蓮子が目を付けたのは月を食べる幻想・伝説の類であり原因となった羅喉らこうなどの悪魔を調伏できる神霊を巡めぐったが収穫はなく、星神である天津甕星あまつみかほしを皮切りに月つきよみのみこと読命、次いで明王の類も当たったが全て無駄足に終わった。そして京都内を粗方調べ終えた二人は東京近隣にまで足を伸ばしたがなおも答えは見い出せずメリーにヴィジョンが与えられることもなかった。草原と化した環状線の罅割ひびれた道路の先にある碑や潮が引く事で姿を現す毀こ壊れた堂からは何も得るところなく、東京から北上した山中に建つ神社を終ついに二人は立ち止まった。

午後すもものことで日も深まり、木々の下へ抜けてくる空気の色も李すももの頃となった境内に少女が二人。それだけだっ

たはずだ。葉擦れと小さな生き物の音、樹皮と土と髪の毛だけのはずであった。

「おおっと。これは珍しい」

秘封倶楽部が振り返るとそこに第三の少女が立っていた。個性的な帽子と単純で古めかしい服、きよろきよろと動く目は森より古く、柔らかく揺れる金の髪もメリーの物と比べるとくすんで見えた。苔生こけむしていると言うべきか。

「いや、私が珍しいのね。しばらく遊んではくれまいか。子供らよ」

朽ちた岩、あるいは森の神が喋っているような少女に二人はひるんで後ずさりをしたが、両手を挙げて微笑んだ少女の軽やかさに制された。

「私は諏訪子といって……あー。諏訪大社の使いなんだから。でも。わかる？ 諏訪大社」

「ええ。近くに入院してたから」

「再発防止にも快癒にも効くよ。ぜひ参拝をどうぞ、異人さん」

会話をメリーにまかせて蓮子はすぐに情報を検索した。この神社と諏訪大社の関係。分社でも何でもなく祭神の共有もない。いや、八百万そのものを祭る性質が強いといえれば共通はしているのか云々。

その様を興味津々といった様子で諏訪子を見た。

「二人は印結びの末裔か何か？ 乱波じゃなさそうだし、もしかして巫女だったりする？」

「ただの学生よ」

「でも空中へ走らせる指の動きが慣れたものじゃないか。

それにまったく関係ない神社を通じて私を外の世界に呼び出すなんて生半可なことじゃない。生贄をたつぷり捧げた訳でもなさそうだし、ただの人間だとしたらそれこそ可怪しい」

「可怪しいのはそちら。探しものはしてるけど神の使いを呼ぼうなんて考えてもなかったのに」

「ともかく話してごらん。さぞかし大それた願い事なんだろうけれども悪い様にはしないから」

夜空に起きた異変について聞かされ、その解決策を探している途中だったという説明は諏訪子の眉間に深い皺を刻んだ。しばらくの沈黙のあとで御使いが語るところによればその願いを聞き届けた神の役割や権能は遠い夜

空に対して特別な力を及ぼすものではないし、そもそも秘封倶楽部の住む世界へ分体——目の前の諏訪子を送り込む理由としては足りないと言う。本来であればこの出会いは起きるはずのない幻である、砂漠に飛び込む蛙は居まいとも付け加えた。

「貴方がここにくる余地ができてるって事？」

調べ物から引き上げてきた蓮子の質問へ鷹揚に諏訪子は頷く。

「私の命をつなぐ湿った苔に君たちになつてくれてるんだろう。よく見ればずいぶん夢遊びが過ぎているようだけれど足元をすくわれないようにね。さて、私の本体はいつも暇でなにか面白そうなことがあれば取りあえず関わってみる質なんだ。だからこうやって出張したりするの

は我が事ながらわかる。わからないのはどうやって二人と私の間に縁ができたかということだ。

ところで疑問が生まれたら君たちはどうする。果報を寝て待つ？」

「いま私達は何をしに来てるか分かって聞いているのかしら。もちろん見つけに……」

蓮子とメリーは顔を見合わせ、諏訪子が笑う。

「当分連れてってよ。お代は私——洩矢諏訪子を神様だと信じてほしい」

「信じてるわ。神様は墓場しか見たことがないけれど」

「死地にも信仰の花は咲く。大地の本懐であることだ」

暇を持て余した神様を連れて秘封倶楽部は再び探索の舞台を京都に移した。主目的が観光であることを認めた上

で神様からの見地を惜しみなく二人へ提供すると諏訪子は約束した。どこまでも貸し借りの関係を崩そうとはしない姿勢は気安くもあつたし、提言の幾つかは有用だったがそれでもなお諏訪子は与えられすぎていただろう。

すでに京都と人間の科学は昔日の物ではなかった。尖塔を思わせる建物は高く細く最も無骨なものでさえ一つの記号として情感へ訴えかけ、なおかつ天候や時間によって景色の邪魔になる場合は光学迷彩でその姿を消した。長い壁を持つものはその身に網細工の如き紋様を走らせ、磨きぬかれた窓の配置の妙は日か月によって金剛砂の七色を見せる。刃の如く切り立ちながら納められる直前の翼じみて湾曲する街灯から下される光も千差万別で、その下を通る人の膚もまた多様。星のように光る露を散ら

した庭園と池、音をたてずに過ぎていく銀の籠じみた観
光車。

諏訪子の驚異と共に日々は過ぎていく。七日、十三日、
四十六日。

「天狗の仕業じゃないかな」

アサイーと餡とクリームのパンケーキを頬張りながら
諏訪子が言ったのは川沿いの道から山を見上げた時だっ
た。その向こうの空はすでに暗く、一番星を追ってきた
星がちらちら瞬き始めている。

「あれだけ飛べるんだ。星の一つや二つもぎ取れてもお
かしくないじゃない」

「案外馬鹿にできないことを言うのが腹立たしいけど、
その線はス力だったじゃない」

「諦めては駄目だよ。そもそもあんな高いところを今の私がどうこうできるもんか。星には星の専門家を呼ばなきゃ」

「出来の悪い神様だなあ」

ぼやいた蓮子の服の中へ手を突っ込み短い悲鳴をあげさせながら取り上げた手帳を諏訪子がばらばらとめくる。

「泥棒！」

「私はエーアールだか拡張現実だかいう仮想を見れないんだもの。私に何か伝え忘れてる事とか無いかなって」
「言えば貸すから勝手に触らないでよ。びっくりするじゃない」

「我は神なるぞ。おや、どうしたのマエリベリー」
立ち止まり俯いたメリーが天を指差すのに少し遅れて

蓮子が架空の文字盤を操作し、諏訪子はケーキの残りを荒々しく口へ放り込んだ。残照はあと幾らほど凋落せず
にいられるだろうか、夜の傾斜は深まっっていく。

星喰いが再び観測された。

天体的な時間を用いてもなお消える心配のなかった光がわずか数秒で消える恐怖に社会と人間たちは混乱を起こしかき乱され、そのしわ寄せが静かに人々へ覆いかぶさっていく中でも止まることなく二人は夜空への答えを目指し続けた。

「あいつはどうも飛行体じゃないね」

夜深くになっても星を観測するために大学構内へ点在する学生たちに混ざって借り受けた小さな教室の陰から諏訪子は言った。蓮子とメリーは黙って次の言葉を待つ

ている。

「飛び回って星を狩ってるんじゃない。岸壁にへばりついた登者のようにして空を掴んでもぎ取ってるんだ。姿が濃くなってきた今ならわかる。巨人なら昔の眷属にいたから。しかし星を摘むとは。茶にして飲むのかな」

「該当する妖怪ならひとつある。高入道の一種。名は星ちぎり」

拡張現実から離れて手帳へ走り書きを刻む蓮子。

「朽ちていく森の樹が選べる道はそんなに多くない。受け入れて死ぬ事、別の場所へ移ること。一番愚かなのは生き延びると信じてその場に留まることだけど、愚かな彼の願いは満たされた。ここは砂漠なんかじゃなくて沃野に戻っていたんだ。私が君たちの前に現れたのはただ

の偶然。どこに出ても良いのであれば先着順で相手をしてだけのこと」

「人間は妖怪を忘れても空を見上げるのは忘れなかった。私の学ぶ超統一物理なんかいい例ね。夜空の向こうに次があると見上げ続けてきたのよ。高入道を見上げるとどうなるか知ってる、メリー？」

どこまでも伸びていく入道をメリーは想像した。高く、高く。やがて星の世界に手が届くほどになってもなお大きく、一人で世界中の幻想を担えるほどの巨人。

「人間は阿呆だね」

諏訪子は呟いて部屋の出口に立ち秘封倶楽部も続いて部屋から退出していく。そのまま三人は街を歩いた。人通りもまばら、数々の灯もどこか重たげで夜の暗がりと

並んだ今では骨を思わせる。すべる風もないが不思議と音は絶えず、常にどこかの隅で小さく擦り合わせたり囁いたりするのが耳に入ってきた。

多くの都市伝説が人々の口端にのぼるようになっていく。理解のできぬ現象から生まれた不安の現れという見地は半ば正解であつたろう。もう半分は諏訪子が語つたではないか。生き残つた森の樹。その生命力が続くのであれば森は再び蘇り、木々を枯らしていた者たちを塗りつぶしていく。夜空を見上げる人々の目を盗むようにして行方不明者が増加している現状を蓮子とメリーは知つていた。

夜の探索を続けるつもりで人やそれ以外の気配から逃げないように交通機関を乗継いでいくと東の高台にある神

社へ三人はたどり着いた。境内へあつた僅かな結界の裂け目をメリーと諏訪子が調べているのを横目で見ながら蓮子は空を見上げていた。以前メリーに渡した時刻と位置情報を知るためのアプリを開き、エラーだらけの表示を見てからすぐに消す。そうする間にもまた一つ星は消えたが蓮子に伝わる時刻と場所への啓示は揺るがない。

だしぬけに星が消えた。ひとつ、またひとつ。心拍に比すほどの速度に圧倒された蓮子は後ずさり駆け寄ってきたメリーに軽く支えられる。すでに地上の音は眠りに落ちた。頭上で次々と篡奪される星の向こう側へ広がっていく天上の黒はしだいにその輪郭を広げていき、その向こうから小さな断末魔の聲が漏れてくるのを二人は耳にしたような気がしたが、それは錯覚であつたかもしれない。

ない。

そして夜の天頂から風を切る音が零れてきた。いまだ光る星々は左右へ押し出されるように際へ向かつて流れだし、天上の影が次第にひとつの形をとりはじめて徐々に降下してくるのを二人は見ていた。

それは男の背面であり、地平から地平へ届く巨大な影となつて秘封倶楽部の頭上を覆つた。世界の軋む音と何処かの山頂が碎け散る音は同時で、その日最初の曙光が差し込んだのもまた同時。巨人の影絵は薄明るい赤光に縁取られて凄まじい遠近を備えはじめた。

蓮子が動いたのはその瞬間であり、メリーの首へ抱きついて駆け抜けるや先ほど見ていた結界の裂け目あたりへ思い切り飛び込み、暗がりに包まれた彼女たちはその

まま宙空へ静止した。

結界の裂け目をどうやって通り抜けたものか。薄闇に満たされた空間は地面も空も存在していないようであった。四辺の流曲線を組み合わせた形の入り口から元居た場所がわずかに見えており、そちらも世界より巨大な背に押しつぶされる直前で全てが止まっている。無意識に止めていた呼吸を再開したメリーは咳き込んで蓮子の腕から滑り落ち、何もないはずの空間で背中を打ち付けてあえいだ。

浮かんだままの姿勢で止まっている蓮子の顔は陰に塗りつぶされて見えず、半身を起き上がらせたメリーはその場へ座り込んだ。

「咄嗟にしては上々。運もいいじゃない」

闇の中で諏訪子がメリーの横へ並ぶ。

「あれは星ちぎり？ あんなに大きくなってるなんて」
「わからんね。異国の空は巨人が支えているという話じやないか。星ちぎりがそいつを、空を殺したのかもしれない」

「幻想も英雄となるために巨人を殺す、ね」

「そのまま人間の世界も平らにできて一石二鳥。よくできてるよ」

「ここはどこ？」

あまてらすのおおみかみ

「天照大神に縁のある神社を選んだのはよくできました。天の岩戸の携帯版みたいな場所よ、きつと。あいつらは好きじゃないからあんまり詳しくないんだけどさ」
颯とかすかな屍臭に鼻をくすぐられる。おそらくは入

り口から降りてきた臭いに対して、どうにもならないのだとメリーは悟った。あれほどの現象を前にして残された時間は数秒もあるかどうかというところで、それ以上は何をしようと四海ごと押しつぶされてしまうのだろう。蓮子をじつと見てから人間の少女は首を垂れた。

「私は運がいいと言ったよ。マエリベリー・ハーン。どうして諦めるの」

静かな声で諏訪子は見下ろした。

「君はまだ一つやってない事がある。勇氣ある者が忘れるか端から切り捨ててしまう事。神様を探す秘封倶楽部の盲点」

眼が、結界を見ることのできる美しい眼が太古の神に注がれた。そして皮肉げな弱々しい笑みがメリーの顔に

射す。

「拝と拍は何回ずつ？」

「いらない」

深く目を閉じ手を強く結びながらメリーは頭を垂れた。祈りと願い。何よりも先に捧げられた原初の生贄を前にして諏訪子は石と化した。もしくは樹。もしくは土。そしてそれら全てが跪いて少女を抱き取り、慰めた。

「八百万は頼られることで初めて共に在りうる。いつの夜か再び思い出すがよい」

諏訪子の手がメリーの手をそつと撫でると、そこに一冊の手帳が残った。

「夢見る者よ。彼の地への道標を与えてつかわす。人が恐れるために生まれた地でこの種を蒔いて歩むがよい。」

ただし時の最果てに及ぶまで身か魂を引き裂かれ続けることになるかもしれぬゆえ、無理強いはすまい」

メリーは長いこと答えなかった。そして立ち上がると諏訪子へ手を差し伸べた。

「よい夢を。マエリベリー・ハーン」

その瞬間に諏訪子は煙と塵と沈黙と化していた。体中にそれを浴びたメリーは肺いっぱい吸い込んで土の匂いを――幻想郷第一二期以降のあらゆる時代の土の匂いを味わった。メリーの視界は完全に拭い去られ、それから冷たい風に植物が揺さぶられる音を聞いた。

視界が戻ってみれば月明かりも針金ほどしか通らぬ深い闇の底、おそらくは夜の竹林に彼女は立っていた。風が起こすより大きな音に振り向けばそこには燃える二つ

の瞳が待ち構えており、即座に踵を返して逃げようとしたメリーは手帳を思い出して一頁を引き抜くと循環する血液の疾さで投げ捨てた。それが土に落ちるよりも早くメリーへ向かつて炎は駆け出していたが、その切っ先が届くより先に少女は居なくなっている。影に見失ったか、別の道を見つけたか。

幻想郷においてある噂が起こった。跳梁跋扈する未知の妖怪がいるという流言であり、不審な紙片が三十ほど見出された事から端を発している。紙片には外の世界について記述された文章が走り書きされているだけだったが、発見された場所と時代の全てが異なっていたにも関わらず筆跡は全て一致している点が面白げに囁かれた。

ばらまかれた月日の幅は百五十年ほどであり、よもや人間ではあるまいと好奇心の強い者が真偽を確かめるために動きまわってみれば更に断片は追加され、やがて頁となると多くの妖怪や人間の目に触れて他愛のない文章の中に無視できぬ一節が紛れ込んでいるのを誰かが見つけた。

『星が食べられていく』

メモを残している人物はどうやら向こう側から幻想を調べている者だという事はすでに分かっていたが、外の世界でそれほどの大妖怪が生き延びるところか人間に見える場所で大それた活動を起こせるという点で多くの住人は首をひねり、死蔵されていた物や新しく見つかった物を次々と探索によつて組み合わせていく流れに幻想郷

の住人は熱中していくようだった。

紙片の人物はまるで結論にたどり着けておらず、おそらくそれは向こうの社会もそうだったのだろうと予想していた時に見つかった『星ちぎり』^{おのの}という文字で幻想郷の者たちは多くのことを思いつき、^{おのの}慄いた。砂漠予定地より移った樹も残った樹も根は同じくしていたのだから。

紙や文字に対する分析が行われ、およそ百年後に外の世界で星が食われていく変事が起こる事を知った幻想郷はひとつの作業に取り掛かった。外の世界にいる星ちぎりを殺すなりこちらへ引き込むと決められた。外の世界があつてこそその幻想郷であり共倒れは望むところではない。たとえ人間世界をすりつぶしたところでその後には幻想が蔓延できるとは限らず、そんな博打は彼らの肌に合

わなかつたのだ。

星ちぎりが肥大化する前ならば十分に可能であると見通しが立てられると外の世界で動きまわるための方法も編み出されていき、最終的に星の世界まで飛び上がる役は天狗が抜擢された。神々の案内人よりも古い出自に凶流星として語られた彼らはまさに天の狗であり、未来の英雄を食い殺すにはちょうどよいと忍び笑った物も幾人かいただろう。

計画決行の夜、妖怪の山の裾から天狗を詰め込んだ機体が夜空を駆け昇っていく。各宗教団体の提出した理論と式をミックスした結晶の製作に関わった河童たちや鬼が飛行場から見上げる火は実に禍々しく、そこから遙か離れた山頂の神社内宮より見つめていた諏訪子の好みに

合っていた。

「考えられているよりも因果ってやつは横顔を向けて見逃すことが多い。時間も世界も騙されやすいってことを人間はいつ知るのやら」

百年後の外界で何事もなく復帰する秘封倶楽部の二人の表情を想像して呟いた神様が顔をつるりと撫でると、いつの間にか足元へ『すわこ。諏訪子』と蓮子の筆跡で書かれた紙片が置かれていた。神の坐す内奥まで出向き外界への遊歩を咎める者を思い浮かべて諏訪子は口の端を釣り上げ微笑んだ。

「流星乱舞を見られないのは残念だけど蛙はおとなしく冬眠するかね。おやすみ。小さな人の子ら」

遠くなった飛行物に背を向けて、諏訪子は奥の暗がり

へ進んでいった。

蓮子とメリーは呆気なく元の生活に戻った。巨人は夢であり、一連の喧騒は超新星爆発に伴う調査や噂に置き換わり時間を流れていった。

砕け散った最期の光で明々と肥大した星にも慣れたとある夜、秘封倶楽部は活動を開始していた。メリーのビジョンを元に関連する寺社にたどり着くと結界の裂け目を探る。星を食われた日々が真の夢でない事の証拠を二人は追い続けており、しかもそれはあまり困難な道でもなかった。証拠があるのだ。正確には失われたというベキか。彼女たちはいま蓮子のメモ帳を探している。メリーの記憶によれば一冊を千切って歩いた場所は多岐にわ

たり、それゆえにひとつくらいはたどり着ける場所もあるだろうと高をくくって。

空を見上げたメリーはしばらくしてから呟いた。

「二二時四一分四六秒」

蓮子も夜空を仰いで頷く。

「正解。まだ入ってるの、そのアプリ」

「ええ。貴方やっぱり気持ち悪いわよ。拡張現実でもないのに時間と場所がわかるなんて」

「今回の件でアナログも馬鹿にした物じゃないって自覚できたでしょう。さあ、そっちの気持ち悪い目で失せ物探しの神様を見つけてよ」

「あら、蓮子。違うわ。まず最初はこうするのよ」

メリーは緩く手を握り、結界の裂け目に向かって礼を

した。肩をすくめた蓮子も続けて柏手を打ち、頭を下げ
る。

「ちよつと」

二人の後ろから不機嫌そうな声がした。振り向くとそこには第三の少女が立っていた。個性的な帽子と単純で古めかしい服。きよろきよろと動く視線は想定外の出来事に驚くというよりも策略に絡め捕られた策士のそれ。

「なんでまた呼び出せたの」

「諏訪明神に失せ物探しのご利益なんてあったのね。諏訪子」

「どこの神様だつてやってるよ。おみくじ引いてごらん！
なんでわざわざ諏訪……何処ここ」

「京都の八坂神社」

諏訪子の喉がごくりと鳴る。

「なんで？」

「私たちが聞きたい。なんで貴方が出てくるのかわからないわ」

「メリーが八雲立つ空を見たからすきのおのみこと素戔鳴尊に関するここを選んだの。探索に縁もある神様だし、いい手がかりができたと思ったんだけど」

「あら蓮子。さつき諏訪子は『どこの神様だってできる』って胸を張ってたよ。お願いしたら出てきてくれたんだしこれが手がかりなんじゃない」

掌の中にある違和感に諏訪子が気付いてそっと開いてみると、そこには『すわこ』と記された紙片があった。脳裏に胡散臭い笑顔の妖怪と小うるさい同居神の笑みが

浮かび長らく気ままに振る舞つてきたツケが支払わされることになるかと神は直感した。一度縁に結ばれた二人の願ひであれば――苔の願ひであるならば諏訪子は応える事が可能だ。憶測にすぎないが罰する者たちの名をこうも雄弁に見せられてはその意図も鮮やかに透けて見えたのだ。斧を指でなぞる処刑人の微笑みさながら。

「駄目だよ。こっち側に居るのはちよつと不味いんだ」

「それなら大丈夫。探しものは私のメモだから向こう側の道案内を頼みたいの」

「なお不味いよ！」

「あつ。ヴィジョンが来たわ」

諏訪子を羽交い締めにした蓮子の瞳の上へメリーの手が柔らかく置かれる。

「どれどれ。おや、柱だらけの湖。散策にピッタリね」
タイミングから考えて間違はなく碌な事にならないと
悟った諏訪子は無茶苦茶に手を振り回してみたが無駄で
あり、ただ掌の向こうから星に笑われるだけだった。

（終）